

保育者の援助位置についての考察(1)

梅田優子
(新潟中央短期大学)

【はじめに】

子どもが園内の環境にかかわり自分の遊びや活動に取り組むことを大切に保育の実践場面においては、保育室をはじめ遊戯室など園内の所々に子どもの姿があったり、また保育室内においても幾つかの場に別れて子どもが遊びを展開する姿になる。それに対して、担任保育者は一人ないし二人の場合が多く、ある子ども(達)や遊びの場にかかわれば他の子ども達や遊びの場について見通すことが難しいのは理であろう。一方で、保育者は「一人一人の子どもに目を配り、それぞれの遊びに適切な援助をする」ことをめざしている存在でもあり、この理想と現実の狭間で揺れ動いているように思われる。この揺れは、自分の専門性を常に磨き続ける問いとしても成立するが、一方で漠然としたまま自分の援助への自信をもてなさを生んでいるようにも思われた。また同時に、保育者の選択の背景の見えにくさが、子ども自身が展開する遊びを大切に保育の理解の難しさにもつながっているように考えられた。

そこで、子どもが自らの遊びを展開する保育場面の事例を取り上げ、'主体的に考え、動く存在としての保育者'の援助行動の選択が、どのような考えや子ども理解から成り立っているのか、特にその『位置』の選択に焦点を当てて具体的な考察を試みてみたい。なお、今回は、保育者が積極的に遊びの継続発展にかかわった部分を取り上げる。

【方法】

新潟県内N幼稚園のクラス担任をしているT保育者に焦点を当てた観察を行った。筆者が担任保育者の動きを追って観察を行い、記録は、保育場面においてはノートに保育者の行動や子どもの様子などについてのメモを取った。それらをもとに、後に筆者が文章記録化した。また、保育者の援助行動の意図等については、基本的にはその日の保育終了後に、担任保育者への聞き取りを行った。テープレコーダーに録音し、後日、筆者が文字化した。また担任保育者が作成した、観察当日を含む週案や日案等の資料も、保育者の意図を示す資料として扱っている。

観察は平成8年度当初から開始したが、上記のような方法を探ったのは平成9年2月からとなった。今回は、その初回となった平成9年2月18日のものをとりあげる。T保育者(保育歴5年)は平成8年度は3歳児クラス(男児9人、女児11人)を担当していた。通常はS保育者(非常勤)が補佐にはいるが、園内事情により、この日は担任保育者のみで保育が行われた。

【結果及び考察】

1 保育者の援助行動

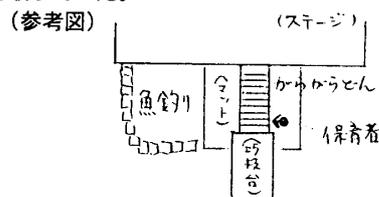
(1) 保育者のかかわりの概要

この日の保育者は、9:00前から登園してくる子ども達を保育室で迎える。雪遊びに出かけたいとやってきた男児2人の支度を手伝い送り出す等したあとで、9:20頃から遊戯室の「がらがらどん」に参加する。9:30に雪遊びから戻ってきた男児に呼ばれ保育室へ行き、後始末を手伝う等のあと、9:41「がらがらどん」に再び参加する。9:52「魚釣り」に参加する。9:55 母親が呼びにきて、その用事で保育室へ行く。「トイレへ行きたい」女児からの訴え

で排泄の手伝いなどしたあと、10:08 再度「釣り」に参加する。10:25 保育室へ行き、女児達におやつをすることを伝え、片づけを始める。10:30 遊戯室へ、積み木を子どもの話し合いながら整理し、釣りの場はそのまま残す。10:40 手洗い・おやつ(給食時間が遅いため、給食が始まったばかりの3歳児は、ここで軽いおやつをとる)・紙芝居をする。

(2) 保育者が選択していた場と位置

この日の保育者が、遊びの継続・発展にかかわったのは、「がらがらどん」と「魚釣り」の遊びをする子ども達の場であり、遊戯室であった。ステージを利用して巧技台との間に梯子を渡し、そこががらがらどんの遊びの場になり、そのすぐ隣に積み木や青いシートを使っての魚釣りの遊びの場があった。保育者はまず、がらがらどんの遊びにかかわったが、その際には魚釣りの遊びの場が視界のほぼ正面に入るような位置を取っていた。



(3) 「がらがらどん」への保育者のかかわりの内容

この遊びの子どもにとってのおもしろさは、トロール役(子ども達からの要請)の保育者とのやりとりと、少し高い梯子をわたることにあるように思われた。保育者はトロール役の中で、「俺さまの橋を渡るのは誰だー」といった、絵本のストーリーの再現や、「もう少しすると大きな山羊が来るよー」と発言すると、次の子どもが「大きい山羊です」と名乗るなど、全体のストーリーの推進も担っていた。同時に、子どもが一人で梯子をわたる(特に女児の渡り方は危なっかしい感じが、観察者にも感じられた)ことへの注意もなされていた。例えば、子どもの身体にさりげなく手を添え(バランスを崩したときにとっさに支えることもできるような動作)たり、梯子の下にいる子ども達へ「上から落ちてくるから危ないよ」と声をかけたりすることなどである。

(ときどき、魚釣りの方へ視線が注がれていた。)

(4) 「魚釣り」への保育者のかかわりの内容 (省略)

2 援助の位置選択への背景

(1) 共に居よう・見続けようとする保育者の指向性

(インタビュー冒頭より)

遊戯室での遊びをやっているところで、私もそれを大切にしていきたくて考えていた。(a) 前日、魚釣りをしたいからという、その場で遊びたい子どもと、積み木があるからと、積み木に惹かれてやってくる子ども達と、イメージが重ならず、大きなトラブルになった。それで全部積み木を片づけてしまっていた。

この日の朝、「がらがらどんしようよ」とD男、E子、Y

子(担任がいるところに拠り所を求める子ども達)など言うてくるこどもと、魚釣りをしたい子どもがいた。どっちの方に深く入っていかうかなと迷いながらも、がらがらどんの方は、私がいないと遊びたいが成立しないと思ったので、そっちの方にかかわりながら、魚釣りの様子を見守ること(b)にした。

下線部(a)について、担任は具体的には以下のようにとらえていた。

(担任作成資料より抜粋)

「最近、なるべく私は男の子達の遊びにかかわっている」それは「男の子達の多くは、TVの番組をもとにしたごっこが好きで、積み木を使ってバイクをつくり、それにまたがったり「ポウゾクが現れた」と敵があらわれたつもりになって出かけていって戻ってくるということを繰り返して遊んできた。子ども達の様子を見てると本当に好きな様子が伝わってくる。他の遊びをしていても、「ポウゾクが現れた」という言葉は、魔法のように子ども達の気もちを引きつけて、あっという間に変身して出かけてしまう。好きなものになりきって遊ぶことを十分に楽しんで欲しいと思い、見守ったり、一緒になって遊んだりしてきたが、それだけでいいのだろうかという思いがある。好きなことを否定していくのではなく、保育者として子ども達の中に積極的にかかわり、子ども達がそこからまた好きな遊びを拡げていくということ(7)を、保育の中で考えていきたい。」とし、遊戯室での援助については、「積み木でバイクをつくってのTVごっこだけじゃない楽しさを伝えたいと思って援助している。遊戯室に積み木を移して(2)始まった、今回の遊びは、S男、J男、K男などが、マルチパネルを使って橋の下をくぐって遊んでいたことをきっかけに、海になったり、積み木で船を造ったり鮫や鰐をやっつけたりして遊んできた。船を造るための積み木がきっかけとなり男の子ほとんどがそこにかかわってきている(1)。これまでのTVごっことは違い、すぐに思いが共通になるわけではなく、かなり保育者の仲立ちも必要ではあるし、子ども達にとってうまく伝わらずトラブルになることも切ない思いをすることもあった(4)。しかし、必要なものをどうやってつくるかやってみたり、どうやって伝えようか考えたりしながら、なりきって遊ぶ楽しさを感じてきている(6)ように思う。」

「昨日の遊びの様子から、作りながら遊んでいく方が、それぞれのしたいことの方向が見つかりやすいのではないかといったん片づけた。魚釣りごっこがしたいのか、がらがらどんごっこがしたいのか、それとも他なのか、一緒に必要なものを作りながら考えていきたい。(6)」

担任は、「男児達の遊びを拡げていきたい(下線部①)」という願いが根底にあり、積み木(このクラスの男児達にとっては春から大きな魅力を持ち続けていたものだった)の遊戯室への移動(下線部②)を契機として、これまではかかわりのなかった子ども同士がかかわったり、お互いの思いを言葉で伝えていくことが要求されるようなかかわりの変化(下線部③④)や、自分たちで遊びのイメージを創り出していくような遊びの変化(下線部⑤)などがあることをとらえている。どの方向に動くかはわからないが、その動きつつある男児達とできるだけ共に居たいとする保育者の指向性(下線部⑥)が、かなり明確にあると言えるだろう。

それに対して、他の子ども達や遊びについて、保育者はどのように考えていたのだろうか。この日子ども達が遊びを展開する場所は、保育室と遊戯室の大きく二カ所に分かれていた。保育者は、遊戯室に居れば保育室の状況はほとんど見通

せず、保育室にいればその逆である。保育者は、保育室のことについては以下のように考えていた。

(インタビューより)

保育室は、女の子が中心で、この女の子達は、自分たちで遊べるようになってきた。(7)それゆえにS子のように(いざこざのようになって)飛び出してきたり相手がある中にはいるのだけれど、自分たちなりに遊びたい相手があって、お互いに声を掛け合っている(8)。「おうちごっこ」が大筋なのだけれど、それが盛んに、学校に行くだの、何だのと自分たちなりにお話をつくって、ひととき遊んでいる様子がある(9)から、自分がそこにいなくても大丈夫かなというのがあったから。男の子達のことが気になっていながら、なかなか関わっていないというのもある。

保育者はこの時期「気のあった友達と言葉を交わして一緒に遊ぶ楽しさを味わう」(週案より)ことを願いとして持っていた。その願いと今の保育室での女児達の持つ力やかかわりの姿(下線部⑦⑧⑨)は比較的重なっているように思われた。日案にも、この子ども達については「けんかになりながらも伝えようとしている姿をなるべく見守っていききたい」とされており、この子ども達のかかわりや遊びの蓄積の方向に比較的「任せていく」(任せていてもよい)という指向性を保育者は持っていたと考えられる。

このように、保育者の、これまでの子ども達との生活の歴史の読み取りからでてくる指向性が、保育者が積極的にかかわろうとする子どもや遊び、さらには位置の選択にかかわってきていると考えられた。

(2)子どもや遊びの動きの実際と保育者の指向性のバランス

このような指向性をかなり明確にこの時期の保育者は持っており、そのうえで実際には下線部(b)のように「私がいないと遊びたいが成立しない」ととらえた「がらがらどん」に最初にかかわっている。その援助の内容は1-(3)に示している通りであるが、この時点での遊びの成立に保育者のかかわりは不可欠であったと感じられた。そして筆者から見て、保育者は子ども達とのやりとりを十分に楽しんでいるように感じられた。かかわっているその場で子ども達とのやりとりを決しておろそかにしているわけではないが、そのかかわりを展開する際に、隣の魚釣りの遊びの動きをキャッチしやすいよう、魚釣りの場が視界のほぼ正面に来る位置をとって魚釣りの方へ時折、視線が注がれていた。(がらがらどんにかかわるといっただけならば、その逆の位置でも可能であったと考えられる。)魚釣りの子ども達の動きを見つけていきたいとする保育者の指向性が、この位置をとることを選択させていると考えられた。

【おわりに】

この事例の検討からは、保育者が子どもの遊びに積極的に援助を展開する位置の選択においては、①子ども達との生活の歴史の読み取りからでてくる保育者の指向性を基盤としていることが見えてきた。②その際、保育者の、子どもと共に居よう・動きを見つけていこうとする指向性が保育者の位置選択に働いていた。③さらに、ある子ども達や遊びには「かかわる」ことと、保育者が指向性を持つ別の子ども達や遊びには「見る」ことの援助を成り立たせていこうとすることが、その位置選択に現れていると考えられた。あわせて、その子どもや遊びに「かかわる」ということと、その遊びにかかわるときに「どの位置を取って」かかわるか、は密接ではあるけれども、不可分ではないということも確認された。